**岡田　八千代 （おかだ・やちよ）**

**１、プロフィール**

兄小山内薫の影響で、早くから創作に携わる。小説家、戯曲家として作品は多い。画家岡田三郎助と結婚後も雑誌「青鞜」や「女人芸術」等で活躍した。

＜生没＞

1883（明治16）年12月３日 ～ 1962（昭和37）年２月10日

＜代表作＞

小説『新緑』

戯曲『黄楊の櫛』『若き日の小山内薫』

＜青森との関わり＞

父小山内健は、旧津軽藩士、陸軍一等軍医正で、広島で生まれた。兄が小山内薫である。

**２、作家解説**

小説家、劇作家、演劇評論家、演出家。芹影、芹影女、伊達虫子の別号がある。旧姓小山内。小山内薫の実妹。

父は旧津軽藩士で陸軍一等軍医正小山内健。広島陸軍衛戌病院長であった健の次女として広島市に生まれた。父の死後、東京に移住。数え年20歳で牛込の成女学校に入学した。兄の影響もあって早くから文学に目覚め、35年８月号の雑誌「明星」に小品文「めぐりあひ」を発表したのが処女作である。36年には芹影女の名で文壇に、劇壇に注目されるようになる。

短編集『門の草』が処女作品集として39年４月に刊行されたが、その年の12月画家岡田三郎助と結婚している。結婚後も創作活動は止むことはなく、長編小説『新緑』や『恐怖』を刊行していく。

44年９月、平塚らいてうらの雑誌「青鞜」が創刊されると、八千代はこれに戯曲を発表した。大正12年７月には長谷川時雨と雑誌「女人芸術」を創刊して文壇に、そして演劇界にも多忙となった。昭和２年夫婦でフランスへ旅立ったが、帰りは別々の帰国となった。八千代が岡田家に戻ったのは、14年に夫三郎助が亡くなってからである。

間もなく軍国時代となり、16年には、海軍報道班の戦地慰問隊に加わって中南支に旅した。戦後は、23年に日本女流劇作協会を創立、会長として活躍した。37年２月没、享年80歳。

**３、資料紹介**

〇「別々の演技」

原稿（ペン書き）

300mm×430mm

演劇評論。東劇五月の出し物（２日目）についての批評が記されている。発表誌紙不詳。